
とある弱小ギルドの金策な1日。

湊奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある弱小ギルドの金策な1日。

【Nコード】

N2589Y

【作者名】

漣奈

【あらすじ】

カザンに居を構えるとあるメンバーが4人だけの弱小ギルド「ザ・ゲオルギウス」。

貧乏ながらも暮らしていたが、ある日とうとう宿代すら怪しくなってしまう。

4人はミロスの「名もなき小洞」でのバクベア狩りをする事になったが、そう簡単には終わらなくて！

（キャラ名や容姿、ギルド名は私のプレイデータに基づいているの

で公式ではありません。ご注意ください！
(残酷な描写ありは保険です)

「お・か・ね・が、ないです！」

ここは英雄王の居城・カザン共和国の宿屋、六剣亭の一室。メンバーが4人きりの弱小ギルド　ザ・ゲオルギウス　の会計担当であるメイジ・ゲニウスは、テーブルに書類を叩き付けて叫んだ。

黒い髪を短く逆立て、黒い瞳に黒縁の眼鏡をしている彼は、学都と名高いプレロマの出身。メイジでありながら普通の敵には魔法を出し惜しみし、その分強い敵に魔法を叩き付けるスタンスのために杖で殴る力がついてきているという一風変わったメイジだ。

「金がない？　金持ち辺りから盗めばいいじゃないか。ほら、2階の貴族とか」

あくまでも冷静な声音でゲニウスに問題発言を投げかけたのは、このギルドの発起人でリーダーのローグ・レナだ。

浅黒い肌に蜂蜜色の髪を持ち、常に赤いマフラーで口元を隠した彼女は短剣を得意とする暗殺者。現在は暗殺から足を洗って、1人の冒険者としてギルド　ザ・ゲオルギウス　を率いている。たまにローグならではの発言をして総ツツコミを受けるのはもはや日常だ。

「レナさん、そんな事したら後が大変ですよ？　ま、いざとなったらボクは他人の振りをさせていただきますが」

さらりと酷い言葉を吐いたのは、ギルド唯一の回復役・ヒーラーのカイン。

栗色の髪に、木漏れ日色の瞳と細いフレームの眼鏡。一見優男な彼は、その外見とは裏腹にギリギリまで回復をせず杖で殴るといふヒーラーらしくない行動を取る青年だ。

「カイン、リーダー。POWボーナスのかかった　シルドバニッシ　そのけそのけ、いる？」

「シルドマスタリー盾の正しい使い方　唯一の攻撃技を使うと脅したのはナイトの少女・ミリアナ。」

長い金髪をリボンで2つに縛り、鎧を可愛らしく着飾った彼女は盾で守るよりも盾で殴る事が多い事を除けば普通のナイトだ。ギルドのサブリーダーを務める彼女は、レナの無軌道を腕力で止めるギルド内の数少ないストッパーにして良心でもある。

「何かクエストを受けないと、もう宿代も払えませんか！」

ゲニウスはメンバー全員に見えるように1枚の紙を出した。

「という訳で！　我々ザ・ゲオルギウス　はこのクエストを受けます！」

その紙には、「名もなき小洞　に出るバグベアの群れを退治して下さい」と書かれていた。　名もなき小洞　はここカザンから東にある美しき箱庭・ミロス連邦国の領土にある洞窟で、1日で行ける距離にある洞窟なのでカザンに依頼が出る事もあった。

「バグベアってあの紫の熊？」

「それ以前に、バグベアって群れるんですね」

「久々に、面白そうなクエストだな」

メンバーの感想はそれぞれ上からミリアナ、カイン、レナである。

レナの「面白いクエストじゃなきゃ受けない」という妙なこだわりを突破できたので、ゲニウスは「よしっ」とガッツポーズをした。

「各自、武器の手入れと荷物の整理。1時間後に出発する」

リーダーであるレナの言葉に、3人が揃って頷く。

「名前負けしているギルドランキング　1位を脱却だ！」

「……おー！」

竜退治の聖人の名前を冠したというのに大した活躍をしていない、と名前負けしているギルドランキング　で1位をさらった　ザ・ゲオルギウス　だが、やる時はきちんとやるギルドであった。というよりも、そうあって欲しい。

三口又連邦国領土、 名もなき小洞 に4人の冒険者が入った。
「松明があるのは助かりますね」

カインが一定間隔で洞窟の壁に灯された松明を見て呟いた。自分達で松明を持って歩くのは非効率的だという事で、一度踏破された洞窟にはこうして松明が灯されるのが常だった。

ピチヨン、ポタン、と何処からか水の滴る音がする。水音に混じって微かな獣の唸り声を聞きつけ、先頭を歩いていたレナはメンバーを手で制した。

「向ここの枝道から、3匹」
「またかよ！」

小声で叫んだゲニウスに賛同するように、ミアナとカインも頷く。一行は既に3桁に上る数のバグベアを倒し、群れのボスを倒すべく洞窟の奥へと向かっていた。いたのだが、異様な遭遇率にため息をつかざるをえない。

ローグ固有スキル： キラーズアトラクト 魔物ホイホイ。レナが発動させたこのスキルはフィールドやダンジョンでの魔物とのエンカウント率を上げる物だ。だが、いくらスキルを使っているからと言ってもこのエンカウント率ははつきり言って異常だった。
「消える」

ごく簡潔に死刑宣告をして、レナは握ったタガーに力を込める。スキルの発動を示す青白い燐光が、その刃を毒々しい緑色に変えた。

ソードマスタリ 正しい剣の使い方 Lv.3： スコルビオ 毒蜘蛛の口づけ、発動

「グルアアアアッ！」

このスキルは発動と共に塗られた毒が付いた剣を振るう事で、一定

確率で対象を毒状態にする事ができる。今回は毒が効いたようで、バグベアについた傷がいかにもな緑色になっていた。

「リーダー！ 魔力の回復アイテムはできればカインかゲニウスに回したいから、スキルは温存で！」

ミリアナがそう叫びながら、スキルの燐光がないただのロングソードでもう1頭を斬る。POWボーナスのついた彼女の一撃は、例えただの物理攻撃でも十二分に有効だ。レナはボーナスをPOWではなくSPDに振っている上にローグという職業柄一撃一撃の重さは（バリバリ戦闘職のファイターやナイトに比べると）少ない。その分を速さと手数、加えてローグ特有のトラップやスキルで補っていた。

「っらあああ！」

向こうでは、カインとゲニウスが杖で3頭目のバグベアをタコ殴りにしている。メイジという純粋な魔法職であるゲニウスは少し辛そうだが、元々何故かスキルツリーに杖で殴るための打撃スキルがあるヒーラーのカインは涼しい顔で殴りかかっていた。

とはいえ、やはり2人共支援職だけあって与えられるダメージの総量は少ない。終わり次第にレナかミリアナが合流する必要があった。

「2人の所には私が行く！ ミリアナ、頼んだ！」

レナが叫ぶと同時に、彼女が相手をしていたバグベアが毒の蓄積ダメージで倒れた。レナは討伐の証であるドロップアイテム：クマの手を鞆に入れると、ゲニウスへ吠えたバグベアにタガーを投げつける。

「ッガアアアアア！？」

そのタガーは背後から急所を的確に刺し、バグベアは倒れた。二人はため息をつくとき、ややうんざりとした様子でクマの手を鞆に入れた。

「バグベアの切り落とし、100グラム1000Gから」

全員の荷物は数少ない回復アイテム以外を悉くバグベアからのドロ

ツプアイテムであるクマの手かで獣の毛皮で占められていた。重さを感じないのがせめてもの救いだが、容量が限界に達するのも時間の問題だ。ゲニウスが淡々とした声音でふざけたくなるのも当然である。

「総員、第1種警戒体制を取れ！」

戦闘後の弛緩した空気を叩くように、突如としてレナが叫んだ。

「群れのボス、猛る野獣のお出ました！　カイン、スキルの起動が分かっただら言え！」

ヒーラー固有スキル：敵感知不意打ちクラッシュャー。誰よりも早く敵

に気づき不意打ちを無効にするこのスキルは、こつした連戦には重宝する物だ。現に、今回のクエストでレナのキリングアトラクト魔物ホイホイに引き寄せられたバグベアの不意打ちを8割近く防いでいる。

「ちよ、ちよっとリーダー！　猛る野獣　ってミッションボス

じゃないですか！　王者の剣　にでも任せましょうよ！　も

うこれだけ狩ったら充分です！」
ゲニウスが思わず叫んだ。

通常力ザンの住人が日常の自力では解決できない問題を張り出すクエストと違って、ミッションの依頼主は大統領府　つまり国だ。報酬は1桁違うが、同時にリスクも1桁違う。猛る野獣はミッションの中では初心者向けとされているものの、あくまでも「ミッションボスの中では」なのでそれでもかなり強いであった。ちなみに、王者の剣　とは数々のミッションをクリアする最強ギルドだ。

名前負けしているギルドランキング　1位とまで言われている弱小ギルド　ザ・ゲオルギウス。目下財政難のこのギルドにとって1桁多い報酬は魅力的だが、1桁多いリスクは全力で願ひ下げだ。

「来ます！」

感知　したカインの叫び。もう逃げられないと腹を括って杖を構えるカインの横で、ゲニウスはため息をついてやはり杖を構えた。

レナはマフラーで口元を隠すとニヤリと笑い、タガーを構える。ミリアナは目を閉じて深呼吸を1回すると、剣を抜き盾を構えた。
「思わぬ大盤振る舞いで、私達の前にミッシオンボスが転がり込んで来た」

レナの言葉は、感情のない平坦な物。暗殺者として生きて来たからか、彼女は声に感情を込めたり消したりといった事が上手だった。その技量は、声に魔力を込める南海の歌姫・プリンセスから「うちの国で修行すれば、女王だって夢ではないのに！」と言わしめたほどだ。

「今回、この 猛る野獣 を倒して、我々は不名誉な称号を挽回する！ 王者の剣 の鼻を明かしてやるうじゃないか！」

レナは強い敵と闘える歓喜を込めて叫ぶ。感情が伝染し、メンバー全員のモチベーションが最高になった。

「うおおおおおっ！」「」

自然と零れたメンバーの叫びが、 名もなき小洞 を震わせた。

「カウンター、かけます！」

フレイムマスター
正しい炎の使い方 Lv.3: 一俺に触れると火傷する

ぜ 《フレイムヴェイル》、発動

ゲニウスのかけたカウンターの魔法が、メンバー全員を包む。全体攻撃以外の攻撃に反応して攻撃した者に炎を浴びせるこの魔法は、ボス戦ではかなり重要だ。

「毒にさせる！」

レナが先ほどと同じスキルを起動させ、 猛る野獣 を毒状態にする。

「耐えてやるっ！」

猛る野獣 の なぎ払い を、ミリアナが盾でガード。

「回復します！」

今回は無視して殴り続けるわけにもいかず、カインが回復魔法をかける。

「グルアアアア！」

猛る野獣の体力が、毒で、炎で、剣で、じりじりと確実に削れ続ける。

そして、

「ッ！」

名もなき小洞 全体を震わせる叫びを残して、猛る野獣は姿を消した。後には、猛る野獣のドロップアイテムのキラースミートがぽつんと残っている。

「や・・・った！」

「倒した！」

「ミッションボスを、私達が倒した！」

メンバーが喜びの声をあげる中、レナがキラースミートを鞆に入れた。戦闘で使い切った回復アイテムの分の空白に確か放り込むと、レナは「帰るぞ！」と声をかけた。

「六剣亭の酒場でエビフライだ！」

あまりのおいしさに、「俺のエビフライを盗み食いた奴は誰だー！」というクエストが起きたとまで言われている六剣亭のエビフライ。全員が更に歓喜の声をあげる中、レナはマフラーの下で嬉しそうに笑った。

後日、ミッションボスを倒してしまったザ・ゲオルギウスが有名になったのは言うまでもない。

(後書き)

希望があれば続ける、かも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2589y/>

とある弱小ギルドの金策な1日。

2011年11月11日17時07分発行